

第5回「家庭科の保育と保育者養成の保育をつなぐシンポジウム」

親と共に進める保育の創造

----- 親理解と家族援助のあり方をめぐって -----

2008年10月18日(土) 13:30 ~ 17:00

<はじめに>

この企画は2004年度から、後に述べるような課題意識のもとに始められ、本年度で5回目になる。

今回は、出演者を除いて一般の参加者が34名、白梅学園大学の「小学校専門・家庭」の受講生の中から約60名、他出演者7名で100名余が参加しました。34名の内訳は、幼稚園・保育園の保育者が11名、同看護師1名、同園長・副園長が3名、家庭福祉員が3名、大学教員2名、高校教員2名、子育て支援関係1名、音楽教室講師1名、一般で申し込んでこられた学生・大学院生5人、その他であった。人数はそれほど多くなく、報告の内容も充実していただけにもったいない状況ではあったが、熱心な意見も出て充実した会になった。

はじめに、本年度の企画趣旨について述べ、その後これまでの経緯について付け加え、最後に若干の討論の様態などについて触れ、今後への課題について考察する。

<第5回の企画趣旨と次第>

これまで、乳幼児と高校生の触れ合いを中心に進めてきたが、今期は、最近問題化してきている親理解に視点を置いて乳幼児保育に携わる者と中学・高校教育に携わる者の両者からの状況や取り組みを提案して頂き討論を深めたいと考えた。改訂された幼稚園教育要領保育所保育指針においても親支援や家族援助が広義の保育内容として明確に位置づけられてきている。ここで考えたいのは、親は子どもの親であると共に一人の職業人でもあ

り、一人の人間であることを位置づけないと、親は子育ての「手段」になってしまいかねない。

一方、中・高の家庭科では、卒業後10年前後には親になって行くであろう生徒を対象に「保育」という科目があり、親になってもならなくてもすべての生徒に親性準備性の教育がなされている。

このように今の子どもの保育と共に今の親と関わる保育者と、将来の親になる青年たちの親性の教育に携わる家庭科とは正に循環的に関わっていると言える。

この両者が手を繋いでいくとき、未来が見えて来るのではないだろうか。

そこで今回は、幼稚園と保育園からそれぞれの親理解と家族援助の取り組みについて話題を提供して頂き、中学・高校からも実践からも提案して頂き、討論を展開する。

コメンテーターには、大学で家庭科における家族教育について長く担当してきた研究者と保育士養成課程にいて家族援助論を講じてきている研究者をそれぞれお一人ずつにお願いした。

[次第] は次のようである。

基調提案

親と共に進める保育の創造 ----- 親理解と家族援助のあり方をめぐって -----

金田利子（白梅学園大学教授）

実践報告

親と共に進める保育の創造 ― 親理解と家族援助のあり方をめぐって ―

1. 幼稚園・保育園の実践から

- ・幼稚園から 松永輝義氏（埼玉・あんず幼稚園園長）
- ・保育園から 市原悟子氏（大阪・アトム共同保育園園長）

2. 中学校・高等学校の実践から

- ・中学校から 金子京子氏（さいたま市立大谷場中学校教諭）
- ・高等学校から 荒井智子氏（神奈川県立氷取沢高等学校統括教諭）

コメンテーター

家庭科教育における家族教育の視点から

鈴木敏子氏（横浜国立大学教授）

保育者養成における家族援助論の視点から

土谷みち子氏（関東学院大学教授）

司会・コーディネーター

金田利子（白梅学園大学）

報告の概要と質疑など

基調提案は、企画趣旨を深め広めた内容であった。特に親を親としてだけでなく多くの役割をもった一人の社会を担う人間としての親理解の視点を発達過程の中から明らかにし、親とともに進むべき展望について提案した。

幼稚園・保育園からの報告は、どちらも親が参加する保育についての実践が紹介された。

松永氏の報告からは親同士の関わりを大切にし、きっかけを作っていくと、どんどんと様々な親の「部活」が生まれ育っていく、地域と結合して、更に地域を活性化することにもつながっていくが、その仕掛け人としての園の役割について学ぶことが出来た。何と「おやおどりの会」から「小学生遊び集団」づくりまで、15以上の会が生まれ発展

している。

市原氏は、「保育園は人生の学校」と位置づけ、親も保育者も赤裸々に自分を出し、大人たちがいかに人間として変革していくかその変革の場が保育園であることに関する実践報告をされた。保育者は家族を繋ぐプロデューサーであり、保育園はまちづくりのプロデューサーであるということが実践的に語られた。

中学・高校での実践

中学校での金子氏の報告は、中学生が親子インタビューで学んだこと、幼児の遊びとその中の会話を通して学んだこと、さらに小学1、2年生との交流など、異なる方法の交流実践をとおして、中学生の親理解を深めていった取り組みが語られた。これらからそれぞれの特徴が見られた。特に乳児を連れた親には15項目の中学生の目からの質問を考えられており、直接に親の思いを聞き取り、自分の親についても見直そうとしている等の成果が見られた。また、幼稚園・保育園では子どもに解決していけるようにしていることから幼児との関わり方を学び、親と園の関係などについても中学生が学んでいく姿が示された。

高等学校での荒井氏の報告は、大人の立場を親としてだけでなく、親のさまざまな役割三つ目標を立てて実践しているという報告があった。それは、将来のライフステージにおけるプランを立て、そこから生ずる責任について考える。自分が考えたライフプランについて「職業・家庭・地域社会」の各視点から考える。責任ある大人の立場を考える。であり、こういう視点での実践は親性準備性の教育にとっても、大人の責任の中の一つとして捉えることにより、人間・親の理解が深まる可能性が見出されるという報告であった。

コメンテーター

家庭科教育の立場からと保育者養成の立場からの両面かどちらも親と深く関わる家族についてお話を頂いた。

鈴木敏子氏は家庭科教育における家族教育において、近代家族をどう乗り越えるか家庭科教師の養成において力を入れている点について展開された。

土谷みち子氏は保育者養成において位置づけられている家族援助論で未来の保育者に大事にしている保護者と共に子どもの成長を支える保育のあり方を中心に論じられた。

質疑応答とまとめ

コメンテーターのお話によって、それぞれこれまでの報告を意義づけたり方向付けたりできた。質問は、アトム共同保育所の斬新な親と保育者の分かり合い、個人情報をもっと出し合う中で自らの人間性を育て合う実践がどのようにして可能になったかの所に集中した。また、そうした乳幼児保育と中・高の実践とがふれあい体験学習をとおして引き続き交流しあえる方向の追究についても希望が出され、今後に期待して終わった。

第2回 白梅子ども学講座

子ども学の可能性 ― 子どもたちの未来に向けて

今年（2008年）度の第2回子ども学講座は次のようなテーマと趣旨で11月から3月（土曜日14時から16時）までかけて全6回にわたって開催された。

テーマ：「子ども学」を人間科学の光に ― その源流から現在、そして未来へ ―

趣旨：今世紀の初頭に、初めて「子ども学」と名の付く学会（日本こども学会）が登場しました。また、ここ数年、本学のみならず「子ども」と冠した大学の学部・学科が急激に増えています。

しかし、歴史を繙いてみますと、明治三十年代頃にはすでに「児童学」という学問が打ち立てられ、子どもを分析的ではなく丸ごと総体的に捉えようとする研究が進められてきました。現在でも

「児童学」という名称を掲げている大学や学部があるのもご承知の通りです。

今回の講座では、「子ども学」の前身とも言えるこの「児童学」にまで立ち返って、改めて“丸ごとの（包括的）子ども研究”の流れをたどる中から、新たな「子ども学」を展望してみたいと考えました。

「全体としての子ども」把握から、「子どもが主体となる」科学としての学へ。人間科学への1つの道標として、新たな「子ども学」の構築について考えてみたいと思います。

具体的には以下のように展開された。（曜日時間は毎回土曜日14時～16時なので省略）

第1回 11月22日

子ども学の源流をたずねて ― 「児童学」の生成と発展 ―

大泉 溥（日本福祉大学教授）